

たものであって、ここにも経済成長の恩恵がある。

こうしたなかで、長い差別の歴史に終止符を打つための努力が、同和教育、同和对策事業として進められている。昭和三十二年（一九五七）の南部の隣保館の建設はその嚆矢であったが、以後南部大火の復興から、最近の国の同和对策特別措置法施行による町の同和对策室設置、さらに新装成る町民館へと町の努力には見るべきものがあり、とくに学校教育、社会教育の両者を通じて同和教育をその柱とする。国民的課題が達成され、差別のあとを断つ日の遠くないことを思わせるものである。

合併以来ここに二十年、その歩みは以上のように見事なものであったが、長い苦闘の歴史からいえば束の間でもある。現在の繁栄を思うにつけても過去を知ることが重要であって、いずれも先人たちの粒々辛苦の成果と云えよう。改めて先人に感謝を捧げたいものである。そしてそれこそが未来の困難を解く道と思う。

「往事を述べて来者を思う」原漢文「史記」

自然編

春野町の自然

位置・疆域

位置・疆域 きやういき 春野町は高知県の中央部に位置し、また吾川郡南部を占める。面積約四十六平方キロメートルの地域は、北は鷲尾山わしお―吉良が峯の山脈によって、高知市および吾川郡伊野町に境し、南はほとんど直線状の海岸線で土佐湾に面する。東は内谷、東諸木東方を走る丘陵をもってまた高知市に連らなり、西は仁西の部分のぞいて、緩やかに屈曲する仁淀川を挟んで土佐市に接する。平面形は南北凡そ七キロメートル、東西凡そ八キロメートル、平行四辺形を思わす規則正しさである。町役場はほとんどその中央に位し、町役場位置の経緯度は左表のようである。

東 経	百三十三度三十二分十四秒
北 緯	三十三度二十二分二十八秒

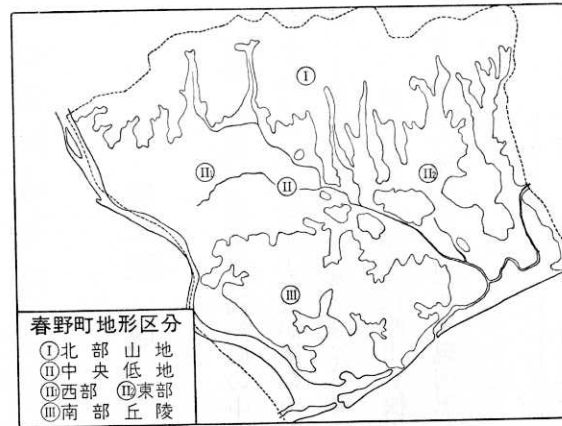
町の平面形が規則正しいことは、町役場から町内各地への連絡を便にしているが、最遠距離の集落も十キロメートルを超えない。したがって自動車でも二十分である。これは春野町が町内に支所を置かず、また学校統合が円滑に進んだ条件である。¹⁾また高知市にも近く、高知県庁まで約十三キロメートル、自動車でも三十分である。現在春野町が高知市の近郊的存在の一面をもつのは、そうした近距離にある関係と思われる。

地形・地質

地形 春野町の地形は東西に带状をなす三区からなっている。すなわち北部山地、中央低地、南部丘陵である。以下各区について順次記述しよう。

北部山地は、高知県南部を東西に走る入不山脈の一部であって、高知平野と吾南、高東の平野を分けている。最高三百五十八メートル、町内を一望にする展望雄大な烏帽子山を主峯に、近世土佐の歌人大倉鷲夫の愛した鷲尾山、今はない古刹跡の柏尾山、戦国の武将に因む吉良が峯と連なる。山脈は、およそ二百メートル以上であって、古い時代から高知平野との交通の多少障害となっている。山地の中央を東西に後述の仏像構造線といわれる断層線が走り、これに沿って治国谷等三カ所の鞍部を持つ通谷が発達し、山地を二条に分けるとともに、これら山地を奥深く侵蝕して、中央低地に流出する溪流の源となっている。

南部丘陵は、最高百四十三メートル高森山を主峯とする妙見山脈であって、周囲に山脚を分岐する。これら山脚には侵蝕谷がよく発達し、古来水田と村を養ってきた。また山脚の一部海岸に臨むところは、甲殿の住吉、仁ノの文庫の鼻等岩礁の点在する景勝となっているが、その他の海岸は、直線的で小砂丘が連なり、その内側には小松の沼等の沼沢を湛える。



中央低地―北部山地と南部丘陵とに囲まれた中央低地は、西は土佐市のいわゆる高東平野に連なり、両者を一体とすれば凸レンズ状の低地となる。春野町の部分は吾南平野と呼ばれてきたが、仁淀川流域平野といえることができる。

大仁淀国原縫うて五月晴 田村 無人(高知市)

仁淀川は愛媛県石鎚山より発源し、延々東南流して高知県を横断、春野町で土佐湾に注ぐが、古来吾川、高岡兩郡の境となったことが多く、春野町の西境となる。ただし前述のように西畑では平江須賀西端が郡境となっている。これは仁淀川の河身が東方に移ったからであって、その時代は不明であるが、仁淀川は古来水害の激しい川として、そうしたことはあるいは自然であったとも思われる。なお仁淀川の屈曲する所には、西畑のあもずあるいは新居(土佐市)の十文字のような淵があり、洪水の際の侵蝕の激しさが知られる。また河口が台風等による

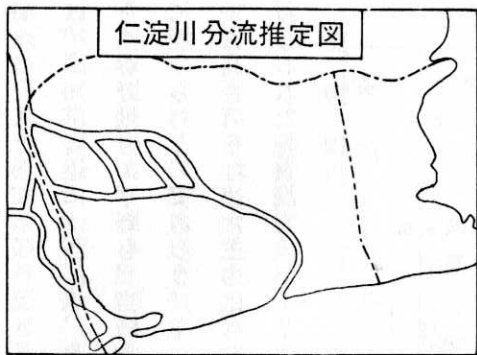
在吾川高岡兩郡之間國中第一大川也源出自伊豫國松山云今作二淀川

者恐非也延喜内膳式譜國貢進御衆
 條云二佐國押年魚一千雙煮鹽年魚
 五岳所貢叔齊殿擬供御蓋上世漁御
 贊年魚於此川故為石至今出大年魚
 國內無此

「土佐幽考」(高知県立図書館蔵)

暴浪のため塞がれ、洪水の害を助長したことも、かつて仁ノの晴天の洪水としてよく知られていることである。

中央低地は、以上の仁淀川およびその分流新川の堆積平野であって、「沃野東西に展けて万頃望むべく、白壁樹間に隠見」(「四カ村合同趣意書」)する豊かな地域である。新川川は現在堤防によって仁淀川本流から遮断され、弘岡井筋の餘り水と、北部山地および南部丘陵からの溪流とを、併



せて排水する役割を持つに過ぎないが、かつては仁淀川の分流として、相当の川であったことは、中央低地に残る木ノ瀬、古川、諸木瀬、中川原等の小字―ホノギによっても明らかである。したがって洪水の度ごとに、仁淀川本流とその分流は乱流しながら兩岸に土砂を堆積する。これが自然堤防であって、中央低地には約一メートルの比高をもって連なり、古来集落に利用されるとともに、弘岡井筋幹線の貫流するところとなっている。

低地そのものは全体として十メートル未満であるが、春野町役場を南北に貫く台地によって東、西二部となる。西部はほとんど台地のない平坦かつ広濶な部分で、春野町の生産地帯としては第一である。東部は掌状に発達する溪谷によって分けられた台地が拡がり、溪谷沿いの低地と入り交って複雑であって、溪谷の上流には扇状地が堆積しているが、海岸に近づいては低窪地となり、古来排水に苦しんだ地域である。嵩上げ等土地改良が行なわれたが、西部に比しては、その生産力に多少の相違があったようである。もっとも西部も中央の自然堤と背後山地との間は、低湿地が現在もかなり広い。これらの低窪地は、近接した山地、丘陵からの溪流のため、土砂の堆積が少なかったからである。

地質 春野町の地質構造については、甲藤次郎氏の「高知県の地質」に明らかである。いま主として同書によって以下説明することにしよう。

まず前述仏像構造線に注意しよう。この構造線は、禰原―吾桑―孕―野市―大栃―別府と高知県をほぼ東西に走る断層線であって、「荒倉にはその見事な露頭があって、天然記念物にしたいほどである」同書のように、春野町の北部を走り、これに沿って通谷が発達している。この構造線を境にして、北は古生界の秩父帯に属する地層が分布し、とくに虚空蔵山層群と呼ばれる。その地層には石灰岩を含み、吉良が峯の石灰岩はこれに属している。春野町にとっては貴重な鉱物資源であるが、伊予川等にはまた鐘乳洞も発達し、洞内を抜けた地下水は水分

神社、荒倉神社で清冽な湧泉となっている。

仏像構造線を境にした南の部分は、一部は東西に走る烏帽子山、柏尾山として、古生層と一体となって北部山地を形成しているが、他の部分は中央低地の台地、南部丘陵へと拡がって、その分布区域は広い。これらの地層は中世界白亜系の半山層であって、同書はまた四万十帯―四万十川層群と整理される。岩層は砂岩勝ちの互層に礫岩を挟んでいるが、「岩相の単調さと化石の貧困さ、ならびに構造の複雑さなどのために、地質の説明をはなはだ難解にしている」同書というのである。

なお仏像構造線は北に傾斜する衝上断層であって、比較的若い地質時代に活動のあったことを教えているといわれるが、春野地方には、悠久の昔、この構造線形成を中心に大地変が繰り返されたのであろう。また同書は地質構造と生活の關係にふれて、和歌山県日高、有田両郡南部の水害―山崩れ地帯と比較し、「同地方の地質条件は、四国では仏像構造線に近接した南側の地層(半山層)とそっくりである」と、豪雨による山崩れの可能性を警告している。注意すべきことであろう。もっとも崩壊しやすい地質が、⁴⁾ 筍の優良品生産と関係があるようにも思われる。

以上の白亜系の四万十帯地層は、長い地質時代に侵蝕あるいは陥没―沈降を受け、相当の谷が発達し、場合によっては海水の侵入による入江―湾を形成する。これが仁淀川およびその分流、さらに、周囲山地の溪流によって埋められたのが中央低地であり、その地層が沖積層である。悠久の地質時代はさておき、³⁾ 洪積世の水河期以後でも、数十万年の間に海進、海退とよばれる

海水の侵入と退却が繰り返されたが、現在に連なるものとしては、約一万年前の縄文海進じょうもんであって、同書によれば、高知市周辺には西は旭、北は久万川、東は大津付近まで「古浦戸湾」という入江が拡がることになる。おそらく春野地方の平野も、当時古浦戸湾に比定される入江―古高吾湾とも呼べるものを形成し、それが現在のよう埋められたのであろう。

古高吾湾を埋めた主力はもちろん仁淀川とその分流である。過去の洪水の記録はこれを伝えるが、いま町内で行なわれた地質調査のボーリングの記録によれば、左表となる。

場所	深度	と埋積物
西分永 井病院	0 m	礫混り砂
	5	風化砂岩
	10	混利砂土 粘土固
	15	(山だけ)
	30	砂利混り青色粘土
	60	玉石を含む砂利
弘岡上 水源池		砂利 粘土混り砂利 砂礫 混利砂土 粘土固
紙同 K高度 K		玉石混り砂利
		利・茶・青

以上の三地の結果から考えられることは、まず仁淀川河身に近い水源池、高度紙工場の砂礫層が厚いことである。とくに高度紙工場では、六十七メートルでなお岩盤に達していない。あるいは同所はかつて、南北方向の断層による異常に深い入江であったのであろうか。⁽⁴⁾これに対して西分永井病院付近は、わずかに地下五メートルで岩盤に達する。これは岩盤が海拔零メートルとなる計算である。したがって台地間の浅い谷を長谷川、仁淀川分流の埋めたものである。近接してこのように大きな相違のあることは、地殻変動の甚大さを語るものであろう。

さて、昭和四十八年(一九七三)秋の弘岡中後田の発掘調査で見られたように、自然堤防内側の低湿地には、相当に厚い粘土層の堆積もある。しかしながら中央低地の多くの部分は、六十メートルにも達する深部は別にして、砂礫質の沖積層が覆う。もっとも表面はすべて厚さ数十センチメートルの耕土である。これら耕土の分布は、開拓過程での人間の力によるものが多く、したがって、弘岡下の堀池等のごとくきわめて耕土の浅い所もあり、「砂土」「砂岩」と「土佐州郡志」に記するところである。いずれにしても、低湿地で厚い粘土層を持つ地域のほかは砂礫層が多く、仁淀川に連なる伏流水を持っている。これは飲料用、農耕用としてきわめて貴重である。もっとも厚い砂礫層は、井戸掘りの時崩壊して人命を奪ったこともある。なおこの堆積層には天然ガスを含むところもあるが、まだ調査も利用もされていない「高知県の地質」。

気候・生物

気候 町役場の位置の、北緯三十三度二十一分餘からいっても、春野町が温帯に属していることが明らかであるうえ、土佐湾に直接臨むことは、いよいよ春野町の気候を温和にする。一般的な気候区分からは、南海区域気候とされる。町内での系統的な観測に基づく気象統計が得られないので、以下まずほとんど多くの相違がないと考えられる、高知地方気象台の高知市における観測値を左に示すことにしよう。

次頁の統計よりは春野町の場合、海岸部の仁西―甲殿―戸原にかけては、さらに冬は暖く夏は涼しいと思われるが、一月の平均は五度余、八月の平均が二十六度余と温和そのものである。もっとも最低、最高の数値は多少変わってくる。冬は零下七度、夏は三十八度に達することがある。これは相当に厳しい気温であるが、堪えられぬ

雨量	温度	月別
54.9 ^{mm}	5.2°	一月
96.6	6.3°	二月
177.2	9.6°	三月
260.9	14.4°	四月
278.9	18.5°	五月
344.1	21.8°	六月
368.6	25.7°	七月
343.6	26.3°	八月
350.4	23.5°	九月
183.9	18.0°	十月
107.5	12.9°	十一月
79.7	7.8°	十二月
2646.3	15.8°	年平均

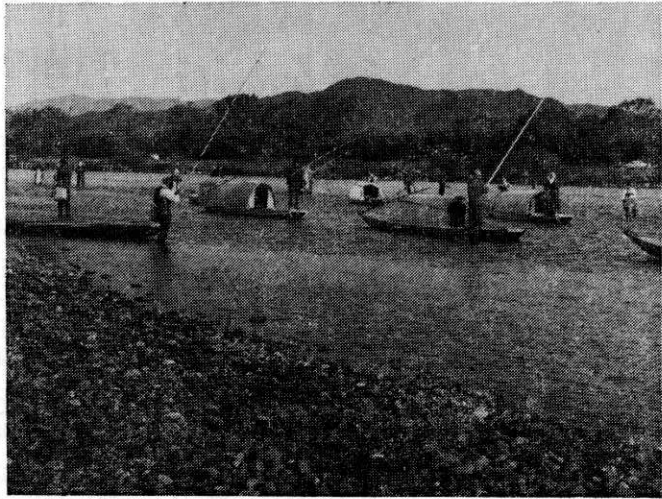
ものではない。軽い暖房でもじゅうぶん凌ぐことができるし、もちろんクーラーも必需品ではない。ただ雨量が相当多いうえ、これが梅雨期と台風期に集中するため、しばしば高温多湿となって人を苦しめる。いわゆる不快指数八十以上の日も少なくない。欠点といえば欠点であろう。もっとも冬も雪は少なく、わずかに数日ちらつく雪を見る日があるが、ほとんど積雪はない。数年間に一回数センチ積む程度である。そのため秋十月より翌年三月までの半年間は、乾燥清明の日が続く。空はあくまで青く、南国の太陽は豊かに注ぐ。まったく天恵といえよう。この気象が、春野町のビニールハウス園芸を育てる最大の条件である。事実ハウスの中は、厳寒もさながらに陽春の候を思わすものがある。

こうした春野町の気候にも悩みがないではない。夏秋の候の台風である。高知地方気象台の統計によれば過去における台風襲来の年別頻度は、

回数	年次昭和
3回	35年
3 "	36 "
0 "	37 "
3 "	38 "
2 "	39 "
4 "	40 "
4 "	41 "
1 "	42 "
3 "	43 "
1 "	44 "
2 "	45 "
2.6 "	平均

これによれば、毎年約三回の台風は春野町にも襲来する。風威猛烈で木を裂き家を倒すほかに、農産物の被害は甚大である。古来どれだけ人びとは台風に苦しめられたことであろうか。郷土の先輩たちが、台風について多くの克明な記録を残しているのは、その災害に傷めつけられたからである。ことに、堤防のなお弱体であった過去の時代にはなおさらである。嘉永二年（一九四九）明治十九年（一八八六）同二十四年（一八九一）と生々しい被害が伝えられているが、詳細については後述するとして、連続長堤が仁淀川辺に完成した今日も、けっして台風の災害は忘れてはならないことである。また台風のときの暴浪が海岸とくに仁淀川、甲殿川（新川川の末端）の出口を塞ぎ、仁ノや甲殿に浸水を繰り返したことも記憶に新しい。砂泥の除去作業は人びとを苦しめたが、これはなお完全に解決されていない。今後さらに努力が続けられなければならないであろう。災害といえばこのほかに、地震、津波があった。宝永四年（一七〇七）、安政元年（一八六四）、昭和二十一年（一九四六）と多くの被害があり、これらについても先人は注意すべき記録を残してくれた。教訓となるものである。いずれもまた後述するところである。

生物 「高知県の自然環境」―昭和四十八年度自然環境保全調査報告―によれば、春野町の気象条件は、年間降水量二千ミリメートル、年平均気温十六度を持つ暖温帯に属しているので、その植生の「主体となるのは常緑広葉樹林または照葉樹林とよばれるタブ、シイ、カシ類などを優占種とする森林であり、群落を構成する種類組成からの区分では、ヤブツバキリクラスといわれるものである。しかし、この地域は早くから人類活動のおもな場となったため、本来の森林はほとんど姿を消して、局地的に見られる残存林におもかげが偲ばれるていどである」と明快である。事実春野町にもほとんど本来の森林は残っていない。社叢しゃそうさえもが自然のものではないようである。諸木地区の中央に聳える愛宕神社あたごの社叢は、遠望してはなはだ雄大であり、そこにはシイ、ヤマイモの



仁 淀 川 落 あ ゆ 漁

仁淀川は後述のように、アユを貢納したことが川の名となったという。昔よりアユは多かったといえる。少年の日、群をなして落鮎が弘岡井筋を満たしていた記憶はまだ明らかである。春三月にはまた小鮎が瀬の水の色を変えてのぼった。ウナギの子も同じであった。今は仁淀川等の川口で捕えて放流しなければならなくなった。仁西のゴリも味で有名であった。浅い川底を、「ガラ」という貝殻をじゅずつなぎにした綱で引いて、綱に追い込んだ漁法ももう戦後は見られなくなった。川底が汚れたせいという。シラウオやフナやコイも同じである。海岸に



ハ マ ボ ウ (甲殿港口)

巨木が群生し、かなり往古の姿を止めているようであるが、そこにも植林の手が進んでおり太古そのままではない。しかしながら、これら社叢は現在ほとんど唯一の原始の姿を窺わせるものである。保護の必要は大であると思われる。⁵ なお、甲殿川沿いの泥土地帯に好んで生育したハマボウ(アオイ科フヨウ属)は、七―八月頃、淡黄色の直径五センチメートル位の花を付けて河口付近を飾ったが、いまはほとんど滅び去った。惜しいことである。近時の庭園ブームによる海岸のウバメガシの亡失も無視できない。

前述春野町は暖温帯の常緑広葉樹林―照葉樹林帯であるが、相当にクロマツを交えて林相は複雑であったが、そのクロマツは、先年からのマツクイムシのためほとんど全滅的な被害を受け、無残な枯木が国破れての嘆きを見せている。マツの常緑に春先のサクラの花や若葉、あるいはツツジの映ずるのは、晩秋の候ハゼの紅葉の映ずるとともに、目に季節感を満喫させるものであったが、マツの枯れたことは惜まれることである。もっとも山も利用すべきものである。利用度の低い現在の二次林には、植林による新しい植生が開発されるべきであろう。たとえば柏尾山北斜面のようにである。

動物については、近世荒倉山が藩の狩場として御留山となっていた時、そこにはシカ、イノシシが多く、藩主たちの狩猟の獲物となっていたが、維新後御留山制廃止とともに、たちまちにしてこれら野獣の姿は消えた。現在ではもちろん春野町にシカ、イノシシはいない。渡り鳥の飛来も減ってしまった。筆者が幼少の時、祖母は幕

末期仁淀川原にツルが来て夜川原で寝たこと、ツルが病死した時は、藩の役人の糺明の厳しいことに人びとが心配したことを語ったが、その時はもうツルはもとよりガンも見えず、時おりカモが低湿地に来るだけであった。それでも大正期にはなおツグミ、ウズラは多く、わなで捕るのは少年の日の狩猟であったが、今はもうこれもほとんど来なくなる。近時ニッポンカワウソが県下各地で騒がれているが、あるいは仁淀川尻には棲息の可能性があるかもわからない。これも少年の日カブソといって、まるで

妖怪変化のように恐れられたものである。こうした恐怖が、生物の保護に役立ったとすれば、現在自然の保護はなかなか容易ではない。現代生活を生んだ長い合理的教育の結果が、自然破壊を生み出した面もあるか。⁶

も、多くの魚が「なむら」をなして押し寄せたであろう昔はもう知る人もほとんどない。イワシさえ沖に出なければ網にはいらない。もはや元に返らぬ自然であろうか。

注1、春野村への合併の時、役場位置で難航したが、現在位置に決定したのは、その後の発展にとってまことに好条件を創出したことである。

〃2、地質構造と地形との不一致は、変化して止まなかった地球の長い歴史からであろう。

〃3、高知市朝倉方面には洪積層の堆積台地があるが、春野町には洪積層の堆積を地上で見ることができない。不思議である。

〃4、東西方向の地形、地質と、南北方向の川の流路との枠組は、一体どういう地殻変動で生れたのであろうか。

〃5、弘岡上行当のクセイ谷の雑木林は、往古の原始林―御留山を語るように繁茂している。

〃6、合理的―近代的教育が、人間の力を自然征服として教えたことに、問題があるのであろうか。

原始・古代編